

## 第2章 葛川谷での被害

### 第1節 葛川の歴史的特色

葛川（現、大津市）は、比良連峰の西、安曇川上流部を占め、川に沿って細長く延びる谷に集落が点在する。葛川の歴史は古く、貞觀元（859）年に山門（比叡山延暦寺）無動寺の相応和尚が開いて以来の天台修驗の道場＝結界の地であり、現在においても、千日回峰行に代表される天台行者の行場である。明王院を中心とする宗教的聖地として開かれた葛川ではあったが、安曇川上流域の山々は、琵琶湖水運を利用できることから、奈良時代以降、材木生産地として開発が進行していく。鎌倉期には山林資源をめぐって、周辺諸荘との種々の紛争を引き起しそうが、特に南部の山門青蓮院領伊香立荘（現、大津市）との相論は、葛川が修驗道場として、本来自然の変革＝開発が許されない聖地であるという特殊な支配のあり方とも絡んで、特異な性格を帯びた。相論の過程で作成された文保元・2（1317・18）年頃の絵図（葛川明王院文書）は、明王院の堂舎や宗教的な「秘所」、あるいは原生林の広がる「深山」や開発の進行した二次林などが色彩鮮やかに描かれており、中世の絵図の中でも最も注目されているもの一つである。

葛川と伊香立荘の相論は、結局、元応2（1320）年7月に、天台修驗行者の介入も手伝って、和与（当事者間の和解）が成立する。葛川は、葛川と伊香立荘とがそれぞれ用益する濁谷以北と崩坂以南の二つの領域に分割・画定されるとともに、堂舎の修理などのための住人・浪人の身分編成も変更され、あわせて田畠所有の確認と徵税のための検注も実施される。葛川では人的にも空間的にも、聖域から荘園へという支配体制の転換が図られたのである。近世の葛川は8か村（坂下村、木戸口村、中村、坊村、町（待）井（居）村、榎（榎木）村、貫井村、細川村）であるが、これらの村名は戦国期には確認できる。室町期に作成された葛川古参詣絵図（葛川明王院文書）には、このうちの南側、坂下・木戸口・中村・坊村が、現在と同じく若狭街道に沿う街村状に描かれている。慶長元（1596）年に、秀吉は中心地である坊村と榎村の一部を延暦寺に寄進する。この2か村は事実上明王院領であり、その他は幕府領となっていく。葛川においては可耕地は乏しいが、山間部に立地するという条件の中で、材木生産や炭焼などとともに、牧畜・狩猟・漁撈などの様々な生産活動が行われていた。

寛文地震においては、後述するように町居村と榎村（1874<明治7>年に梅ノ木村と改称）が山崩れにより大被害を受けたが、現在、町居は安曇川西岸に、梅ノ木は東岸に集村を展開している。地震以前の両村の実態については不明な点が多いが、ある程度推測することはできる。文保絵図は伊香立荘との相論のために作成されたため、対象となった明王院以南が中心となってはいるが、明王院諸堂と「大川」（安曇川）を挟んだ対岸には、川寄りの「田」「畠」と、山寄りに樹木とと

にも「在家」が描かれている。相論絵図独特のデフォルメがあるものの、この「在家」の描かれている位置は、現町居集落と重なる可能性がある（図2-1）。また、元応和与の際の所当並散在年貢注文（葛川明王院文書）からは、明王院より北には、「オボレカキ内」「古川」「菅次郎垣内」「エノキ」「河合」「落合」「ヌク井」「マチ井」（追記部分に「待井」）などの地名が現れ、鎌倉末期の耕地分布を推測することが可能である。これが待井（町居）と榎の初見史料であるが、「オボレ」は現在の町居集落が位置する小字地名であり、他の文書からも「オボレ」に居住者がいたことが確認できる。「古川」は町居集落の北にあたる可能性が高く、「菅次郎垣内」は安曇川東岸、「エノキ」「河合」「落合」は安曇川と針畠川の合流点右岸、現梅ノ木集落周辺と思われる（坂田、1997）（図2-2）。

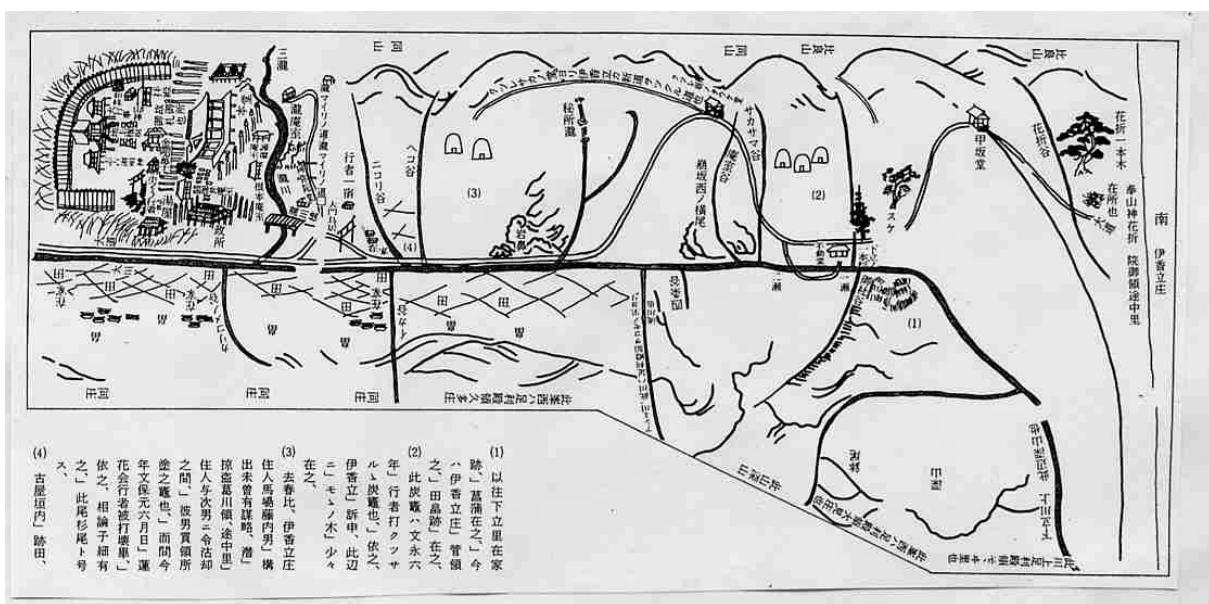


図2-1 文保絵図トレース図（出典：国立歴史民俗博物館『莊園絵図とその世界』、1993）

葛川での居住地は、山の斜面が川に向かって張り出した微高地上にある。聞き取りによても、この地域は洪水常襲地で、何よりも洪水対策が優先される土地柄であり、集落内でも寺社や古くからの家は川から離れた相対的に高い場所を占める。この点は前近代においても全く同じであつたはずで、耕地と集落が小規模なセットになって、より安全な地点に散居していたと思われる。鎌倉末期の年貢注文からは、町居では西岸に、梅ノ木では東岸に、より多くの耕地・居住地が存在したことが推測されるが、集落は現在のように集中してはいなかつたと考えられる。なお室町期の葛川古参詣絵図には、安曇川の西に「町居村とのさかい おほれ谷」との記述があり、町居村が現在と同じく「オボレ」まで広がっていたことが確認できる。

寛文地震による山崩れという大被害にあった町居村と榎村については、復旧による集落移動という問題があり、検討を要する。地震による被害を描いた年次の葛川明王院領内村々差図（葛川明王院文書）には、川の西側に「町居」が描かれ、同じく寛文 10 (1670) 年の葛川と南比良村・北

比良村の山境相論絵図（同）でも、「待井」は西岸に記されている。一方、寛文地震による崩落跡が明瞭に描き込まれている年次の葛川山林絵図（坊村自治会所蔵文書、葛川明王院文書）では、安曇川の東に「町居」の家屋が記されている。また、ともに寛文地震前の正保国絵図の写である正保2（1645）年近江国古御絵図及び元禄10（1697）年近江国御絵図（両者とも滋賀県立図書館所蔵、以下同じ）には、町居村は安曇川の東に記されており、元禄国絵図の写である元禄14（1701）年近江国御絵図では、地震による山崩れの痕跡が書き込まれるとともに、町居村は安曇川の西となっている。一方、山崩れに関する記述（「志賀郡貫井ノ辺ニ吉ヘ町井柚ノ木二村アリ寛文二五朔地震ニ東ノ山崩レニ村ヲ埋」）のある寛保2（1742）年の近江国細見図では、町居村は安曇川の東に記されているものの、天保国絵図の写である天保8（1837）年近江国絵図や安政3（1856）年の細見新補近江国大絵図には、町居村の位置は安曇川の西となっている。

このように、地元に伝えられた大縮尺の絵図には、町居村を安曇川の西に描くものと東に描くものとがあり、また国絵図の系統に連なる近江全体の絵図においても、やはり2タイプが存在する。この相違は時期の違いだけでは説明することはできない。なお、地元では、本来町居集落は、地震後の延宝6（1678）年再建されたと伝えられる観音寺（現集落北部）の北側（昭和14年に地中より応仁2<1468>年銘の宝篋印塔が発見）に位置していたのが、地震により山神社を中心とする南側の現在地へ移動したという伝承を伝えている（大津市、1980）。

町居集落が寛文地震により東から西へ中心を移した可能性は残ろうが、このような絵図の記載や伝承を整合的に解釈することは困難である。1882（明治15）年の『近江国滋賀郡町居村誌』（滋賀県、1979）では、町居村の集落は安曇川の東、若狭街道沿い（小字引ノ尻）と川の西側、山神社周辺（小字ヲボレ）及び観音寺周辺（小字川西）の3か所存在していた（図2-3）。1889（明治22）年の町居村地籍図（大津市役所所蔵）においても、寛文地震の山崩れ跡が禿山として明記されるとともに、やはり東岸にも数軒分の宅地が記載されている（図2-4）。なお、地籍図などからは、葛川谷の村々は安曇川の東岸・西岸にそれぞれまとまって領域をもつではなく、安曇川を挟んで東西に村領域が広がっていたことが知られるが、それは安曇川が増水時を除けば、比較的容易に渡河できる川であり、川を挟んで村落が展開していたことに原因すると思われる。近世の町居村では、中世以来安曇川の西を中心に数か所に居住していたものの、東岸にも居住地が存在していた可能性は高いであろう。近世諸絵図の一見矛盾した表現は、安曇川の両岸にまたがっていた集落が、どちらが主たるものかという判断によって表記に差が生じた可能性がある。町居村は西岸に比重を置きながら再建が進み、近代以降に現集落を核に集村化が進行したと思われる。

榎村については、葛川明王院文書所収近世絵図や国絵図など、全て安曇川の東に描かれており、地形からも大きな移動を想定する必要はない。梅ノ木集落の中心である曹洞宗普済寺には、宝暦8（1758）年の沙門空による「山崩諸靈之塔」が建立されている（写真2-1）。銘文には「当村大地震山崩之年代、至今宝暦八戊寅歳、及九十七歳、則是時予勸化於一村檀越而為諸靈百年忌、造立此石塔、亦書寫於一字一石之大乘妙典經而埋此塚中、所希依此功德、諸靈免三途八難苦厄、到無上佛果、次願當村并葛川谷中除一切惡事災難、自然千吉祥万福徳到来」とあり、寛文地震の

百年忌供養及び榎村と葛川谷の安穏幸福を願って造立された旨が記されている。



図2-2 中世葛川の集落立地 (1/10,000×70%) (作成:水野章二)

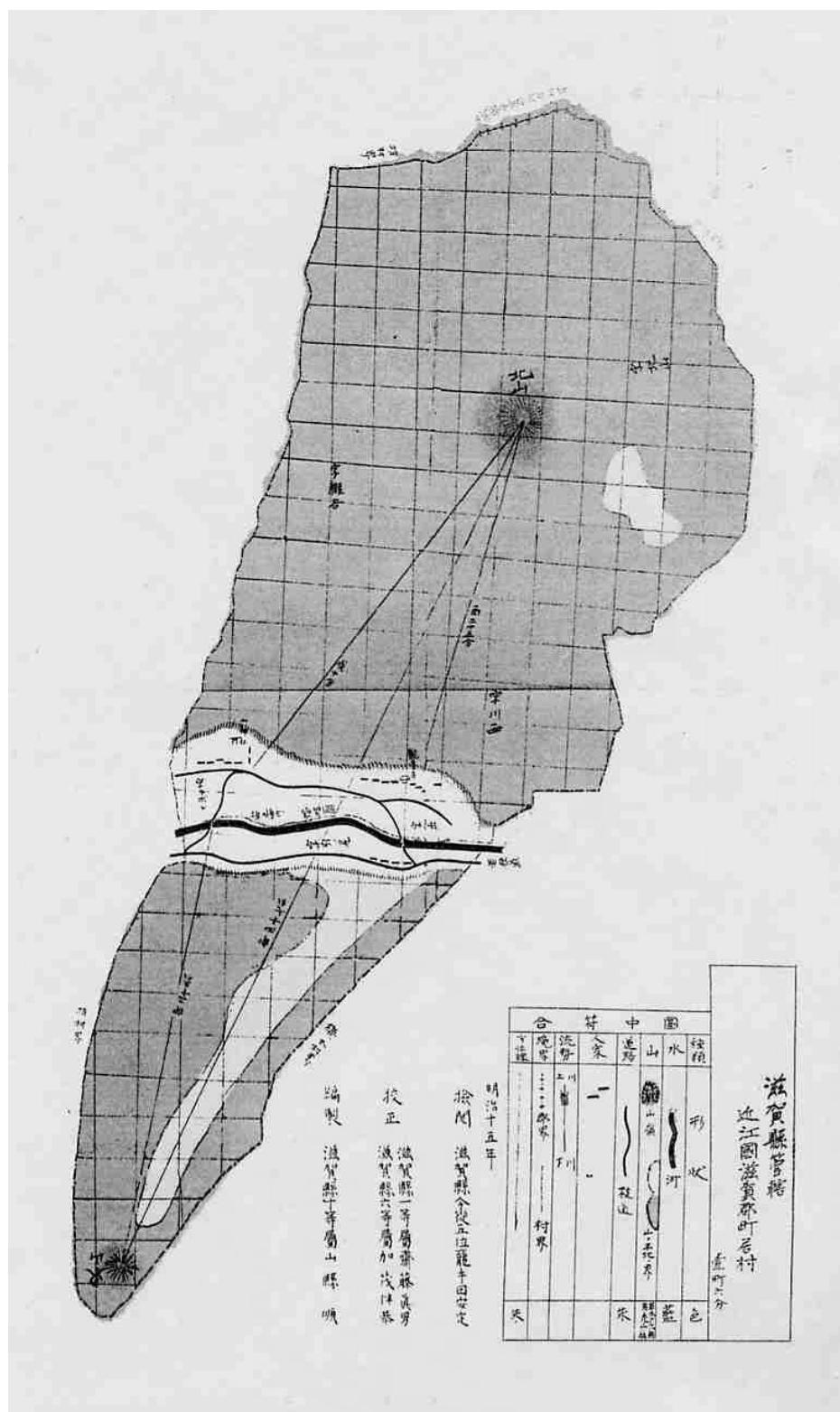


図 2-3 明治 15 (1882) 年町居村図 (出典:『近江國滋賀郡誌』、弘文堂書店、1979)



図2-4 明治22(1889)年町居村地積図 (提供:大津市)

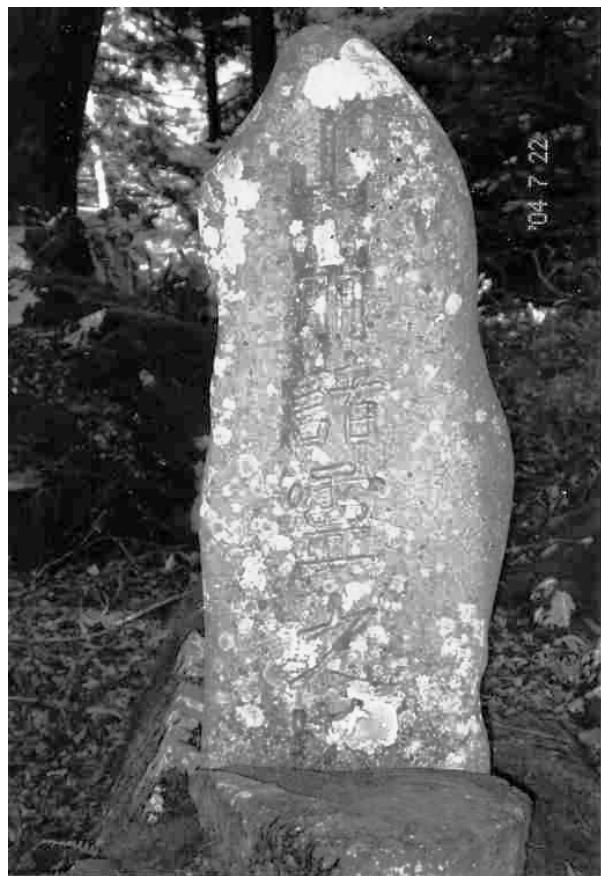


写真2-1 山崩諸靈之塔（撮影：水野章二）

#### 参考文献

- 大津市：『大津市史』，第3卷，1980。  
坂田聰：「中世村落の景観変動」，『日本中世の氏・家・村』，校倉書房，1997。  
滋賀県：『近江国滋賀郡町居村誌』，『近江国滋賀郡誌』所収，弘文堂書店，1979。

## 第2節 町居崩れの発生

### 1 町居崩れによる被害

**葛川谷の地形** 近江国(滋賀県)西部の比良山地西麓をほぼ南南西—北北東に流れる安曇川は、深い渓谷を形成しながら琵琶湖へと流れ込んでいる。安曇川上流部にあたる葛川谷は、花折断層の影響を受けてほぼ直線型の深いV字谷を形成し、比良山地の武奈ヶ岳(標高1,214m)を主峰に急峻な斜面が連続する。付近の地質は、丹波帯の古生層の砂岩・頁岩から形成されているが、花折断層の活動に支配された地形・地質特性に降雨などの誘因が加わり、土砂災害の多発する地域となっている(吉岡ほか、2000)。次では、寛文地震の際に、葛川谷で発生した町居崩れの被害について検討していく。

**土砂崩れの発生** 地震によって葛川谷では、坊村(現、滋賀県大津市葛川坊村町)の葛川明王院の建造物に大きな被害が生じたが、それをはるかに凌ぐ被害をもたらしたのが町居崩れと呼称される大規模な土砂崩れの発生であった(大津市編、1980・1984; 吉谷ほか、1984; 北原ほか、2001)。『葛川明王院文書』や『談海集』といった史料によると、葛川谷での被害や町居崩れによる被害の状況は以下のようである。

寛文2(1662)年5月1日の午上刻(午前11時~11時40分頃)に大地震があり、山の斜面が崩落し、谷からは大水によって土石が流出した。坊村の田畠などは壊滅し、同村の葛川明王院では、地震によって明王堂の石舞台、大橋(三宝橋)や寺の周囲の石垣がことごとく揺り崩れ、庵室なども傾いた。榎村(現、大津市葛川梅ノ木町)の東側の大峰では、13町(約1,417m)ほど上方から二つに分かれて土砂が崩落し、土砂が谷を埋めて高山(堤)のようになり、榎村と町居村(現、大津市葛川町居町)はその崩壊土砂の下に埋没した。大量の崩壊土砂によって形成された堰き止め堤の高さは2町(約218m; 東側斜面に残る崩壊土砂も含めた最大高か)ほどで、長さは8町余り(約872m)あり、その土砂によって多数の村人が生き埋めとなつた。榎村には家屋が50軒余りあつたが、地震による土砂崩れなどによって合計300人余りが死亡した。また、町居村にも家屋が50軒ほどあつたが、ここでは260人余りが土砂崩れによって死亡し、村の総人口300人余りのうち37人だけが生き残つた。町居村ではそのほかに死骸は見あたらず、村内の家などは全て土砂の下敷きになつた。崩壊した大量の土砂は、安曇川の流れを堰き止めて天然ダム(河道閉塞)を形成し、葛川明王院の屋敷の辺りにまで水位が上昇したため、坊村の家屋などは残らず浮かび上がって流失した。堰き止めから14日後の5月15日の辰下刻(午前8時半頃)、町居崩れの崩壊土砂によって形成された天然ダムは大きく決壊し、湛水は急激に引いた。しかし、町居村から葛川明王院の下までは水が残つて大池となつた。

**埋没した町居村と榎村** このように、安曇川上流部の葛川谷では、地震を起因とする町居崩れの

発生によって天然ダムが形成され、その崩壊土砂の下敷きになるなどして約 560 人の死者が生じた。その被害状況を伝え聞いた同時期の仮名草子作家の浅井了意（第 5 章第 5 節参照）は、その著書『かなめいし』の「朽木并葛川、ゆりくづれし事」で次のように記している。

葛川谷では、背後の山が半ば裂けて建ち並ぶ家々の上に崩れ、安曇川の谷を堰き止めたために、日ごとに川の水を湛えて大池となつた。町居村の村人は、突然の災害に対して逃げる場所もなく、家ごと生き埋めになつてしまつた。生き埋めになつても 2、3 日の間は、土の中から男女の泣き声が聞こえていたが、1～2 丈（約 3～6m）もの深さに埋もれてしまつたので掘り出す手段はなかつた。その泣き声を聞いた人々は涙を流して悲しんだが、4、5 日後には泣き声も絶えてしまつた。家の中にいたまま土砂に埋もれて生き残つたのはよいが、外へ出ることができずに泣き叫んでいる人の心のうちは、どれほど悲しいことであろうか。その後、日夜揺れ続けて、最後には死んだのだろうと思うことも哀れである（『かなめいし』）。

この『かなめいし』の記述によると、町居崩れによって家ごと生き埋めになつた人々の中には、その後 2、3 日の間はまだ生存していた者たちがいた。しかし、崩壊土砂に埋もれて壊滅状態に陥つた町居村では、隣村の坊村や榎村も被災していたことから、土砂を取り除いて助け出すにも全く人手が足りず、その手段もなかつたために何ら救助活動を行えなかつた。崩壊土砂の下に生き埋めになつた人々は、その後土中から救出されることなく、結局はその運命を受け入れるしかなかつたという厳しい現実がうかがえよう。

## 2 「葛川山林絵図」について

5 月 1 日の正午頃に発生した地震と町居崩れによって、壊滅的な被害を受けた榎村・町居村・坊村などの葛川谷の状況を描いた絵図として、『葛川明王院文書』蔵の「葛川山林絵図」（図 2-5）が残されている。この絵図は上辺が東、下辺が西となっており、絵図右下には葛川明王院や地主神社が描かれており、下辺には安曇川と川沿いの集落が描き込まれている。絵図の中心は、葛川明王院の背後にある天台修験の修行地としての山々であり、安曇川の西岸上空からの視点をとつて、山林や谷筋・山道などが詳細に描かれている。絵図左下の町居集落の背後には、寛文 2（1662）年の地震で崩れた山肌が「壬寅歳地震崩」と黄色に彩色されている。また、下辺中央の安曇川内には、5 月 15 日午前の天然ダムの決壊後に残つた大池も描かれている。

このような「葛川山林絵図」に描かれた安曇川沿いの景観は、5 月 1 日の町居崩れ発生後、同 15 日の天然ダムの決壊以後の状況を表している。絵図の成立年代については不明であるが、恐らく地震以後それほど時期を隔てることなく、葛川明王院で作成されたものであろう。

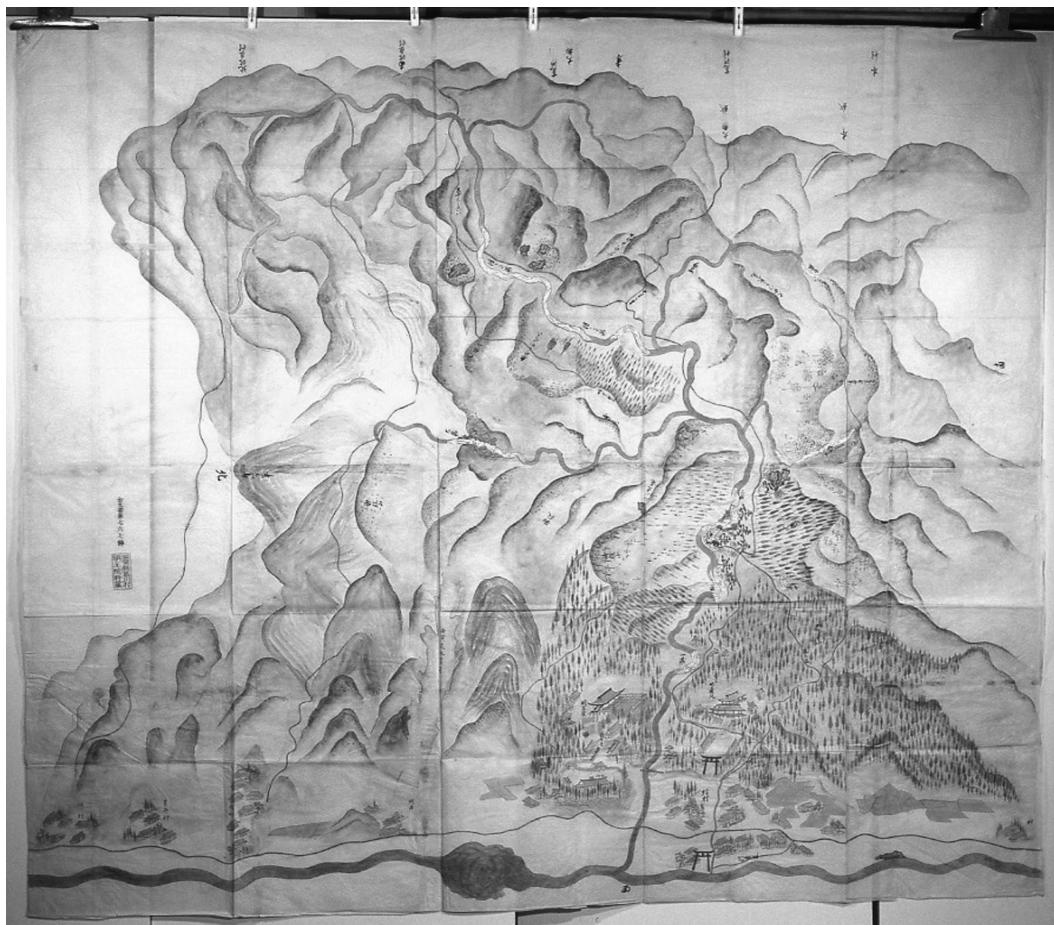


図 2-5 「葛川山林絵図」(葛川明王院文書蔵)



写真 2-2 町居崩れ跡の現状（東から西側斜面を望む）（撮影：西山昭仁）

### 3 町居崩れの崩壊規模

寛文地震によって最大の土砂災害を受けたのは葛川谷であった。現在、大津市葛川町居町の観音寺に所蔵されている「観音寺由緒」という史料によると、葛川谷では、町居崩れが発生した東側斜面だけではなく、西側斜面でも山崩れが発生したらしい（宮崎、2002）。安曇川上流部の葛川谷では、町居崩れをはじめとして、地震によって至る所で大小様々な規模で山崩れが発生した。その中でも町居崩れは、死者約560人というこの地震で最大規模の人的被害をもたらした土砂災害であった。

先述した文献史料や現在の地形図・航空写真・現地調査などから検討すると、町居崩れは、安曇川の東岸、比良山地の武奈ヶ岳の南西約1.5km付近に位置し、現在「イオウハゲ」と呼ばれる崩壊斜面付近に発生した大規模崩壊であったことが推定できる（今村ほか、2002）（図2-6、図2-7）。

#### ＜町居崩れの崩壊規模＞

崩壊長：700m

最大幅：650m

比高：360m

平均傾斜：30度

崩壊面積：46万m<sup>2</sup>

崩壊土砂量：2,400万m<sup>3</sup>

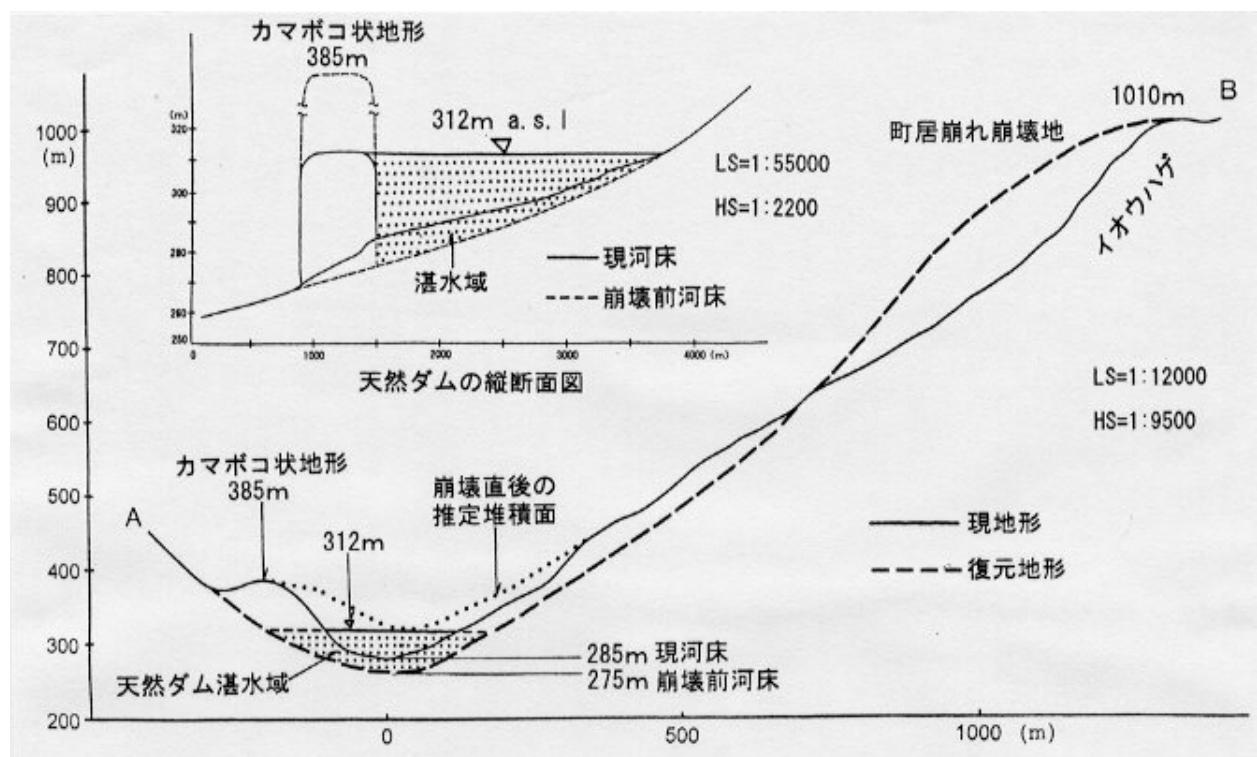


図2-6 町居崩れの推定断面図（出典：今村隆正・井上公夫・西山昭仁；琵琶湖西岸地震（1662年）と町居崩れによる天然ダムの形成と決壊、歴史地震、第18号、pp.52-58、2002）

## 4 天然ダムの形成と規模

**天然ダムによる湛水** 大規模な土砂崩れによる大量の土砂は、安曇川を堰き止めて天然ダムを形成した。安曇川西岸（当時の町居村の集落があったとされる付近）には現在も、安曇川の現河床（285m）より約100mの比高を有するカマボコ状の地形が確認できる。現在、この地は採石場となっており、切土面を観察すると、巨礫を大量に含んだ砂礫層から形成されている。この地形とその背後の斜面とが接する部分には浅い溝状地形が確認されることから、崩壊土砂の多くは急斜面を一気に流下して、対岸（西岸）斜面にまで乗り上げたものと考えられる。

この天然ダムの形成によって、上流に位置する坊村の葛川明王院付近までが湛水した。先述の『葛川明王院文書』には、安曇川が堰き止められて、葛川明王院の屋敷付近にまで水位が達し、坊村の家屋などが残らず浮流した様子が記されている。なお、葛川明王院での聞き取り調査によると、現存する本堂（明王堂）<sup>みょうおうどう</sup>の石段の下から3段目くらいまでの湛水位であったという伝承があるらしい（今村ほか、2002）。

また、同じく『葛川明王院文書』によると、町居崩れによって形成された天然ダムは、5月15日の辰下刻（午前8時半頃）に決壊して水位が急激に低下したが、その後も町居村から葛川明王院の下付近までは湛水が残り、大池となつた様子が記されている。更に、先述の「葛川山林絵図」には町居村と坊村の間の安曇川内に大池が描かれており、天然ダムが決壊した後もしばらくの期間は大池として存在した状況がうかがえる。

**天然ダムの規模** その後、葛川明王院では建物の破損箇所を修復し、翌6月の法会は無事に行うことができたと、「葛川明王院文書」に記されていることや、天然ダムの水位上昇によって葛川明王院の本堂が水没しなかつたことなどから、天然ダムによる湛水位は、本堂石段の下段程度（標高312mほど）までであったと推定する。先述したように、崩壊土砂の多くは一気に対岸（西岸）斜面に乗り上げるように堆積し、東岸側の堆積は逆に少なかつたと推察できる。このため、天然ダムは形成から14日ほどで満水に至り、東岸側から決壊したと想定が可能である。

これらの検討から、大津市都市計画図（S=1/2,500）をもとにして当時の天然ダムを再現すると、図2-7のようになる。また、天然ダムの規模について想定すると次のようになる。ただし、河床縦・横断面から判断して、当時の河床は現在の河床より約10m低い標高275mに設定した（今村ほか、2002）。

### <町居崩れによる天然ダムの規模>

湛水標高：312m

湛水高：37m

湛水面積：48万m<sup>2</sup>

湛水量：590万m<sup>3</sup>

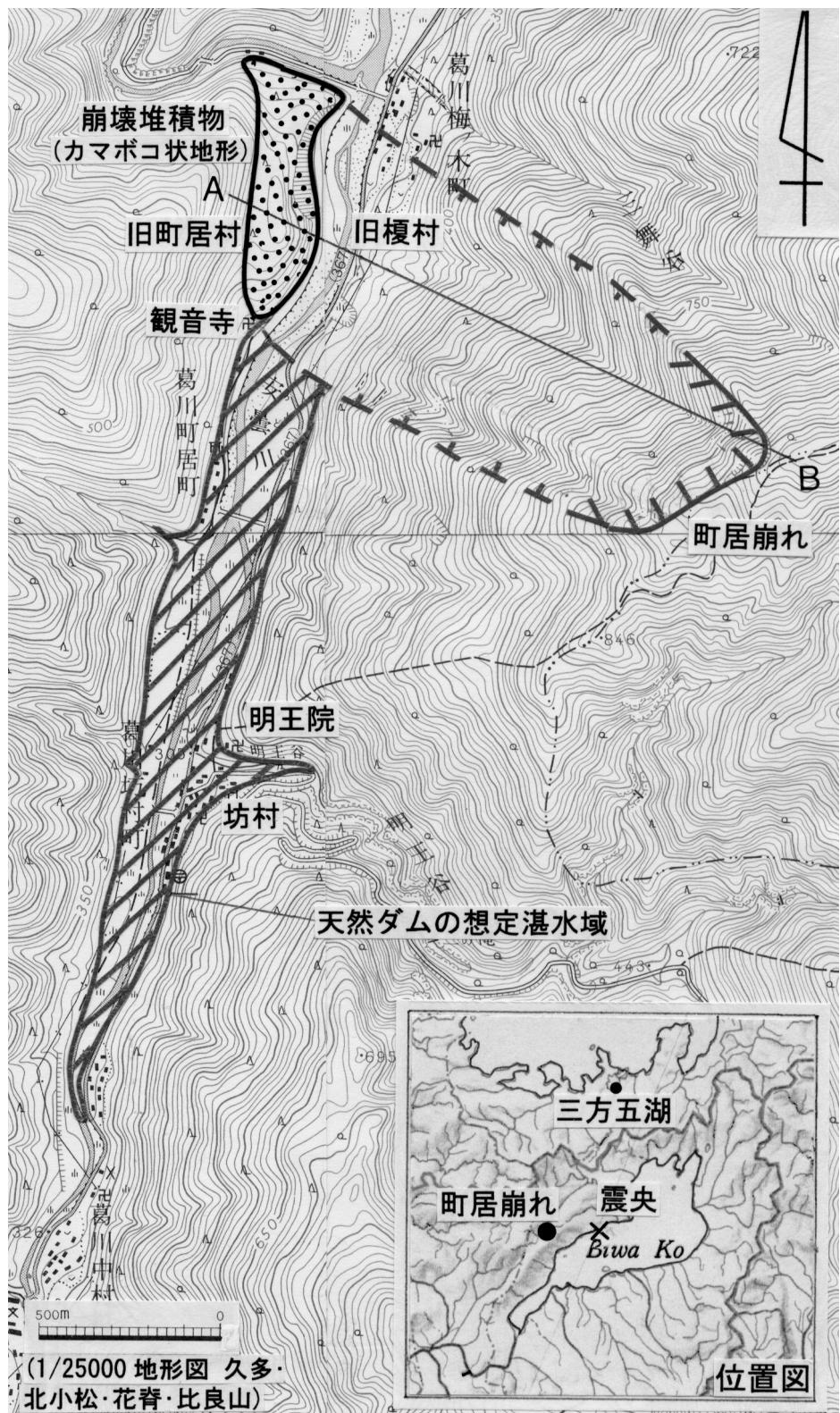


図 2-7 町居崩れによる天然ダムの推定平面図 (出典: 今村隆正・井上公夫・西山昭仁; 琵琶湖西岸地震 (1662 年) と町居崩れによる天然ダムの形成と決壊、歴史地震、第 18 号、pp. 52-58、2002)

注) 右下の位置図に示した震央は、宇佐美龍夫 (1996) に依拠したものであり、従来推定されていた震央の位置を参考までに掲載したものである。

## 参考文献

- 今村隆正, 井上公夫, 西山昭仁: 琵琶湖西岸地震 (1662 年) と町居崩れによる天然ダムの形成と決壊, 歴史地震, 第 18 号, pp. 52–58, 2002.
- 宇佐美龍夫: 新編 日本被害地震総覧 [増補改訂版 416–1995], 東京大学出版会, 1996.
- 大津市編: 新修大津市史 第 3 卷 近世前期, 1980.
- 大津市編: 新修大津市史 第 7 卷 北部地域, 1984.
- 北原糸子, 小松原琢: 葛川谷における寛文地震の土砂崩れと坊村・榎村の被害, 琵琶湖博物館 5 周年記念企画展解説書 鮎——魚がむすぶ琵琶湖と田んぼ——, pp. 65–66, 2001.
- 古谷尊彦, 奥西一夫, 石井孝行, 藤田 崇, 奥田節夫: 地震に伴う歴史的大崩壊の地形解析, 京大防災研年報, No. 27, B-1, pp. 387–396, 1984.
- 宮嶌源太郎: 町居の今昔, 私家版, 2002.
- 吉岡敏和, 長 秋雄, 木村克己, 中江 訓: 2.5 万分の 1 花折断層ストリップマップ・説明書, (独) 産業技術総合研究所 活断層研究センター, 2000.

## 史料

- 『葛川明王院文書』: 東京大学地震研究所編, 新収日本地震史料 第二卷, (社) 日本電気協会, p. 263, 1982.
- 『かなめいし』: 朝倉治彦, 深沢秋男編, 仮名草子集成 第十八卷, 東京堂出版, pp. 175–219, 1996.
- 『談海集』: 国立公文書館内閣文庫所蔵 (請求番号 210-0172), 東京大学地震研究所編, 新収日本地震史料 第二卷, (社) 日本電気協会, pp. 229–230, 1982.

### 第3節 なぜ町居崩れが生じたか

朽木谷の周囲に分布する中生代の地層には、割れ目が多く発達し、特に花折断層の周辺では幅100～300m程度に及ぶ破碎帶によって深部まで脆く変質していることから、起伏の大きな地形とあいまって崩壊が発生しやすい条件をもつ。しかし、未固結層を多く挟み特殊な地質構造や変質作用・火山作用のために巨大崩壊を発生しやすい火山を除けば、史上屈指の巨大崩壊（表2-1）がここで生じた要因については、更に検討する必要があるだろう。

| 名称    | 発生年                  | 崩壊土量<br>(×1000万m <sup>3</sup> ) | 誘因     |
|-------|----------------------|---------------------------------|--------|
| 大谷崩れ  | 1707年                | 9.4                             | 宝永地震   |
| 七面山崩れ | 1707年<br>(初発は鎌倉時代以前) | 2.9～3.8<br>(複数回の総和)             | 宝永地震など |
| 町居崩れ  | 1662年                | 2.4                             | 寛文地震   |
| 帰雲山崩れ | 1586年                | 1                               | 天正地震   |
| 加奈木   | 1707年、1746年          | ≥0.85                           | 宝永地震   |

表2-1 我が国の非火山性山地における巨大崩壊の事例（作成：小松原琢）

（千木良、1995：中村ほか、2000：今村ほか、2002に基づいて作成）

注）1. 史料により崩壊発生時期と原因が把握されている崩壊のみを取り上げた。

2. 火山では特殊な地質・誘因によって非火山性山地よりも巨大な崩壊を高い頻度で発生させるため表に示していない。町居崩れは、非火山性山地における単一の崩壊としては最大級の崩壊といえる。

ところで、空から花折断層周辺を眺めてみると、安曇川沿いに一定の傾斜で平らな板を傾けたような急勾配の斜面（平滑斜面）が並んでいる（図2-8）。

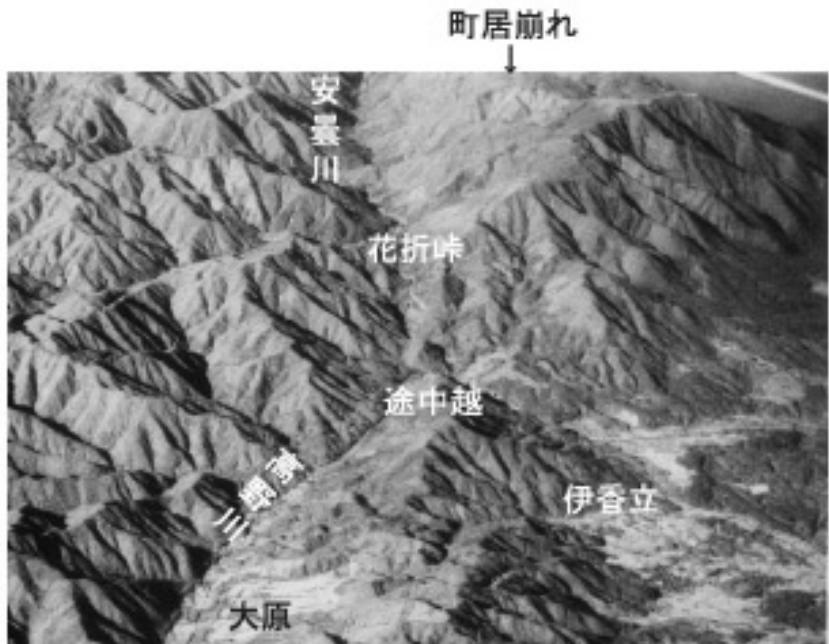


図 2-8 空から見た花折断層沿いの直線状谷（岡田篤正氏提供、1979 年撮影に地名を記入）

注）安曇川上流部は花折断層にそって直線状に伸びている。写真右上端部の白く見える植生のはげた部分が町居崩れの跡。

平滑斜面をずれ動かしている裂け目（線状凹地）や小崖（滑落崖）及び斜面のはらみ出しなど、山地斜面の変形を示す地形（ここでは変状地形と一括する）の分布を図 2-9 に示した。この図に示されるように、町居崩れを中心として南北約 10km にわたり比良山地の西斜面に大規模な変状地形が多く分布する (Chigira, 2000)。ここに示した変状地形は地質構造と無関係に分布し、かつ比較的連続性のよい地形であることなどから、単なる侵食作用によるものとは考えにくく、山地の巨大崩壊に先立つ前兆的な（ただし、数百年以上という時間スケールでの）岩盤の動きによって作られる地形と考えられる。

寛文地震では、こうした岩盤の動きによって元来脆くなっていた山体の直近で、二度の大地震が続発したと考えられる（第 1 章第 2 節参照）。このため、最初の地震によって緩んでいた岩盤に亀裂が生じ、次の山体直下で生じた地震によって岩盤が一気に崩れ落ちるよう崩壊したのではないだろうか。翻ってみれば、当地域のような変状地形が発達する場所で大地震が生じた場合には、規模の大きな崩壊が生じやすいということができる（中村ほか、2000）。山地の地震防災上留意すべき点ではないだろうか。

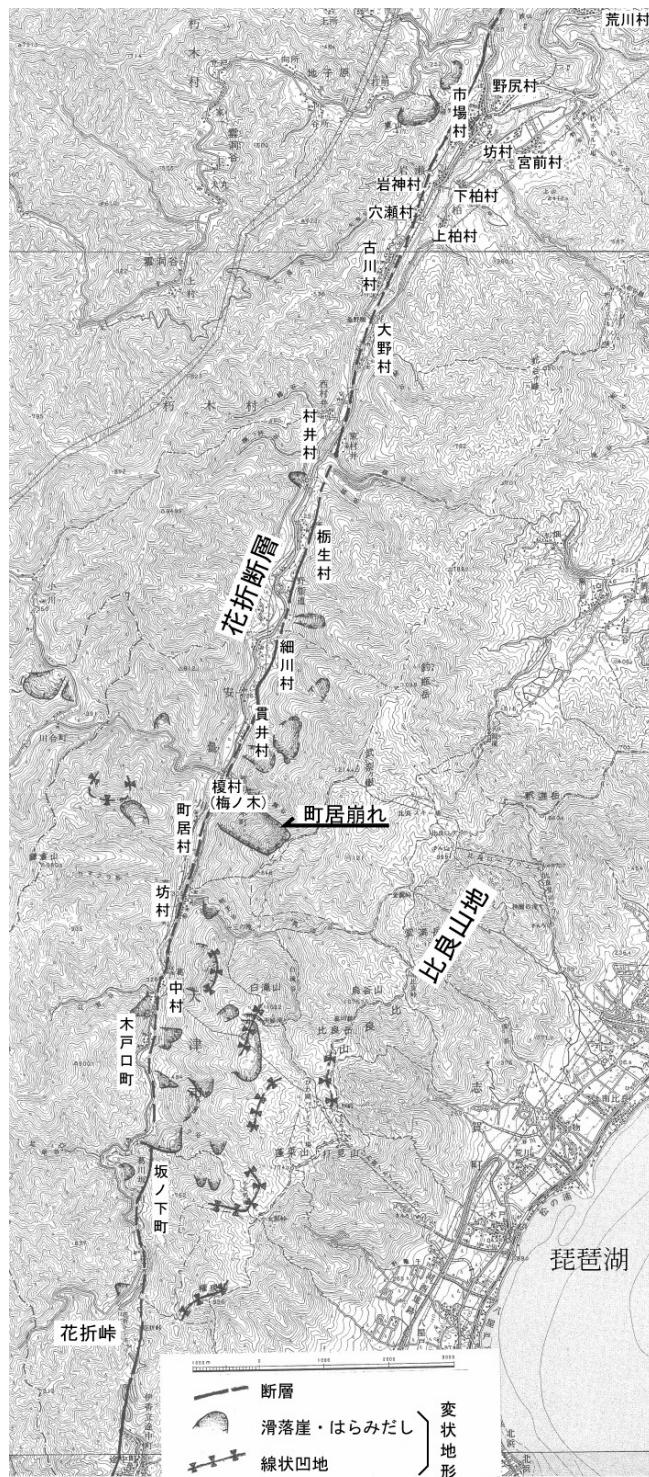


図2-9 花折断層沿いの変状地形の分布（作成：小松原琢）

注) 1. 基図は国土地理院発行の1/50,000地形図「熊川」「北小松」「京都東北部」を使用。

2. 町居崩れを中心とする朽木谷南部には大規模な変状地形が数多く見られる。これらは、崩壊に先立って岩盤の変形が生じていることを示唆する。元来変形して脆くなっていた山地の岩盤が地震によって一気に崩れ落ちたと推定される。

## 参考文献

- 今村隆正, 井上公夫, 西山昭仁:琵琶湖西岸地震(1662年)と町居崩れによる天然ダムの形成と決壊, 歴史地震, 18, pp. 52–58, 2002.
- 木村克己, 吉岡敏和, 中野聰志, 松岡篤:地域地質研究報告(1/50,000 地質図幅), p. 102, 地質調査所, 2001.
- 千木良雅弘:風化と崩壊, 近未来社, p. 204, 1995.
- Chigira, M. : Geological structures of large landslides in Japan. Jour. Nepal Geological Soc. 22, pp. 497–504, 2002.
- 中村浩之, 土屋 智, 井上公夫, 石川芳治編:地震砂防, 古今書院, p. 190, 2000.

## 第4節 震災の影響

葛川谷では、地震の揺れによって坊村の葛川明王院が被害を受け、地震で発生した町居崩れのために町居村・榎村の集落は土砂に埋没し、特に町居村は壊滅的な被害を受けた。また、町居崩れで形成された天然ダムによって上流の坊村の田畠は冠水し、天然ダムの崩壊後も大池が残った。次では、甚大な被害を受けた葛川谷が、震災によってどのような影響を受けたのか、限られた史料から検討を試みたい。

### 1 町居村の場合

**後世に及ぼした影響** 集落が崩壊土砂の下に埋没して全滅に近い被害を受けた町居村では、生き残った村人たちが、被災直後から安曇川の西岸に集まり、掘っ立て小屋を建てて生活を始めた。このときの集落移転によって、町居村は安曇川東岸を通る若狭街道の川向こうだけの集落となってしまい、安曇川には太い丸太の一方を削った一本橋が架けられた。生き残った町居村の人々は、山崩れによって埋没した土地から土砂や岩石を取り除き、畑を開墾して野菜や穀物を作り、自給自足の生活を続けた。また、震災以前の町居村の南外れ、現在の観音寺の北東付近には、曹洞宗永平寺末派の興聖寺（現、高島市朽木岩瀬）末の大儀院があり、広大な庭園を有していた。震災を生き残った村人は、信仰の中心である寺院の再建を企図し、地震以前にあった大儀院を観音寺と改めて延宝6（1678）年に仮本堂を建立した。

また、町居崩れは、町居村には次のような影響を及ぼしたとされる。①若狭街道に対して川向こうの集落となり、街道へ出るために安曇川に架けられた橋は、たびたび発生する洪水で流されて集落の発展を阻害した。②地震で崩壊した町居村の東山（東岸の斜面）では、地震以後、毎年豪雨のたびに出水によって土石流が発生し、麓の若狭街道を塞いで田畠を埋没させ、更には安曇川を堰き止めるなどの被害を引き起こした。③崩落した大岩は、たび重なる洪水でも流されず安曇川河床に残留しており、洪水の際に水流を左右に分けて土手を破壊し、若狭街道や田畠・家屋を流失させる原因となった（宮崎、2002）。

**町居村の復興** 一方、石高の変遷から、町居村の復興状況について考えると次のようになる。表2-2に示したように、震災以前の「正保郷帳」では町居村の石高は約63.1石となっており、震災以後の「元禄郷帳」では約19.2石となっている。そのため、震災以前の正保期（1644～1648年）と震災以後の元禄期（1688～1704年）とでは、後者の方が石高が約43.9石も減少しており、震災後約170年を経た天保期（1830～1844年）に至っても石高の増加はみられない。このことから、震災後の町居村では、失われた田畠や人口の復興は極めて困難な状況下にあり、たび重なる安曇川の洪水による田畠の被害も加わって、生き残った村人たちは自らの生活を維持し続けることで精一杯であったと考える。

| 村名   | 正保郷帳<br>(正保元年成立) | 元禄郷帳<br>(元禄14年成立) | 石高の増減      | 天保郷帳<br>(天保5年成立) | 石高の増減     |
|------|------------------|-------------------|------------|------------------|-----------|
| 細川村  | 103.642石         | 82.293石           | (-21.349石) | 82.293石          |           |
| 貫井村  | 45.495石          | 40.910石           | (-4.585石)  | 40.910石          |           |
| 榎村   | 83.418石          | 46.938石           | (-36.48石)  | 51.139石          | (+4.201石) |
| 町居村  | 63.146石          | 19.160石           | (-43.986石) | 19.160石          |           |
| 坊村   | 50.000石          | 29.400石           | (-20.6石)   | 29.400石          |           |
| 中村   | 92.689石          | 77.219石           | (-15.47石)  | 77.219石          |           |
| 木戸口村 | 53.453石          | 34.147石           | (-19.306石) | 34.147石          |           |
| 坂ノ下村 | 68.922石          | 49.201石           | (-19.721石) | 49.201石          |           |

表2-2 葛川谷(現、大津市葛川)における村別の石高(作成:西山昭仁)

注)(有)平凡社地方資料センター編:日本歴史地名大系 第25巻 滋賀県の地名、平凡社、1991、p1136の表より作成。

## 2 榎村の場合

**被害の状況** 震災からあまり時間が経過していない寛文年間(1661~1673年)に成立したと考えられる図2-10の「葛川明王院領内村々差図」(葛川明王院文書蔵)には、町居崩れによる榎村での田畠や屋敷の被害状況が記載されている。それらの石高を合計すると、40石4斗3升9合4勺の田畠や屋敷が、土砂に埋没したり、河原になつたりして、耕作不能になった状況がうかがえる。また、表2-2をみると、震災以前の「正保郷帳」では榎村の石高は約83.4石となっており、震災以後の「元禄郷帳」では約46.9石となっている。そこで、震災以前の正保期と震災以後の元禄期の石高を比較すると、元禄期の石高の方が約36.5石減少しており、震災によって集落の半分近くが壊滅した状況がわかる。

**榎村の復興** 震災から間もない榎村の石高については、震災以前の「正保郷帳」にある石高約83.4石から、「葛川明王院領内村々差図」にある被災した石高約40.4石を差し引いて、約43.0石と推定することができる。この震災直後の推定石高(約43.0石)と、表2-2にある元禄期の石高(約46.9石)を比較すると、わずか3.9石ほどではあるが元禄期の石高に増加がみられる。このような榎村の石高の増加は、地震によって甚大な被害を受けた寛文2(1662)年から元禄期の約40年の期間に、生き残った村人たちの手によって少しづつ田畠が復旧された結果であろう。

更にその後、寛文2年の震災発生から約170年を経た天保期には、榎村の石高は約51.1石と元禄期よりも少し増加しており、震災によって以前の約52%にまで減少した石高が、天保期には以前の約61%まで回復した状況がわかる。このように、石高の変遷だけでみると、榎村は震災後約170年を経ても震災以前の約61%しか回復しておらず、震災からの復興が極めて困難であった様子がうかがえよう。

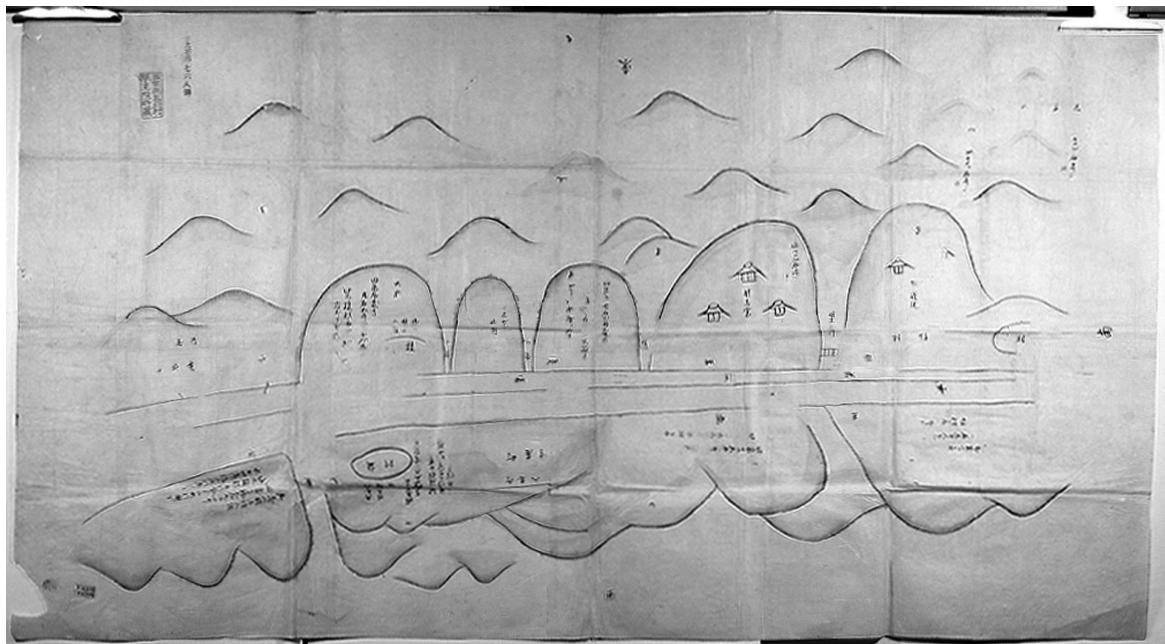


図 2-10 「葛川明王院領内村々差図」(葛川明王院文書蔵)

注) この絵図では、上辺が東、下辺が西となっており、中央には右から左へ安曇川と若狭街道が描かれ、川と街道に沿って榎村や坊村での被害状況が書き込まれている。

### 3 坊村の場合

**被害の状況** 図 2-10 には、天然ダムの形成による坊村での田畠や屋敷の水没状況が記載されている。それらの石高を合計すると、17 石 8 升 7 合 2 勺の田畠や屋敷が水没して耕作不能になったが、5 石 9 斗 6 升 2 合 8 勺の田畠や屋敷は無事であった状況がわかる。また、表 2-2 をみると、震災以前の「正保郷帳」では坊村の石高は 50 石とあり、実際には葛川明王院が領内支配にあたっていたようであるが、震災以後の「元禄郷帳」によると石高は 29.4 石となっている。このように、震災以前の正保期と震災以後の元禄期を比較すると、坊村の石高は 20.6 石減少していた。

**坊村の復興** 震災直後の坊村の石高については、震災以前の「正保郷帳」にある石高約 50 石から、「葛川明王院領内村々差図」にある被災した石高約 17.1 石を差し引いて、約 32.9 石と推定できる。この震災直後の推定石高（約 32.9 石）と、表 2-2 にある元禄期の石高（約 29.4 石）を比較すると、約 3.5 石ほどではあるが元禄期の石高に減少がみられる。このように坊村では、元禄期の石高（29.4 石）の方が、震災直後の石高（推定約 32.9 石）よりも、更に約 3.5 石減少している。このことについては、町居崩れによって形成された天然ダムの決壊以後、安曇川の河道が変化したことによって、坊村の田畠は頻繁に洪水に見舞われる状態となり、村人の手による田畠の復興がほとんど進捗しなかったためと想定する。

その後、寛文 2 (1662) 年の震災発生から約 170 年を経た天保期に至っても、坊村の石高は元禄期と同じ 29.4 石であり、震災発生以後、それ以前の約 59% にまで減少した石高は回復しなかった。震災以後の坊村の人々は、相次ぐ洪水被害によって流出していく田畠を少しでも維持するこ

とで手一杯であり、それ以前の規模に田畠を復興させる余裕はほとんどなかつたのであろう。

以上のような検討から、葛川谷の町居村・榎村・坊村の三つの村では、土砂崩れによる埋没、天然ダムによる水没といった集落の被災状態の相違や、天然ダム決壊後の河道の変化に起因する洪水被害などによって、震災からの復興に多少の格差が生じたことがわかつた。また、この葛川谷の三つの村では、自然環境を改変してしまうほどの大規模な被害を受けたために、その後、震災からの復興はほとんど進展せず、江戸時代後期の19世紀中頃に至っても震災以前の姿を取り戻すことはなかつた。

#### 参考文献

- 大津市歴史博物館：企画展展示解説図録 回峰行と聖地葛川——比叡山・明王院の寺宝——, 2004.  
(有)平凡社地方資料センター編：日本歴史地名大系 第25巻 滋賀県の地名, 平凡社, 1991.  
宮嶌源太郎：町居の今昔, 私家版, 2002.

## 第5節 下流域での被害

前節では、安曇川上流域の葛川谷で発生した町居崩れによる甚大な被害や、それによって形成された天然ダムの被害について検討した。そこで次では、同じ安曇川の中流域にあたる朽木谷での被害状況についてみていきたい。

**朽木谷での被害** 葛川谷の北方(安曇川の下流)にあたる朽木谷(現、高島市朽木の一帯)は、当時、旗本の朽木智綱の領地であり、朽木氏は朽木谷の野尻村(現、高島市朽木野尻)に陣屋を構えて領地の支配にあたっていた。この野尻村での被害については、史料に以下のように記されている。

地震によって野尻村にあった朽木立斎(隠居していた智綱の父)の居宅が被災して、落下した虹梁(梁の一種)に打たれて立斎が死亡し、家来も7、8人死亡した。朽木谷では、そのほかにも家屋の倒壊によって死者が多く出たらしい(『元延実録』、『慶安元禄間記』)。また、地震によって倒壊した朽木立斎の居宅の台所から出火して、近所の漬家は残らず焼失した(『殿中日記』、『寛文二年日記』)。

のことから、葛川谷だけではなく朽木谷でも、地震の激しい揺れによって建物の倒壊などの被害が生じており、倒壊した建物からの出火によって火災が発生し、周囲に延焼した状況がうかがえる。

**天然ダムの決壊による被害** 先述した天然ダムの決壊によって、その下流域にあたる朽木谷では田畠や家屋に大きな被害が生じたことが想像できる。しかし、表2-3をみる限り、朽木谷の村々では、正保元(1644)年頃、元禄14(1701)年頃、天保5(1834)年頃の村別の石高に顕著な増減は生じていない。そのため、地震やその後の天然ダムの決壊によって、朽木谷の村々では多人数の死者や田畠の大規模な流出といった、石高を大きく減少させるような被害は生じなかつたと考えた方が妥当である。しかし、朽木谷の岩神村(現、高島市朽木岩瀬)の地内畠福にあった志子淵神社(筏の祖神)が、寛文2(1662)年の地震と洪水によって社殿を喪失して現在地に移ったことから、天然ダムの決壊によって朽木谷で何らかの被害が生じたことは確かである。

以上のことから、朽木谷の村々で震災以後の石高に顕著な減少がみられない理由として、次のように考える。朽木谷では、村人や田畠・家屋が地震とその後の天然ダムの決壊によって何らかの被害を受けたが、それは比較的小規模な被害であったために、震災から元禄14年頃までの約40年間にほぼ復旧がなされたのであろう。

他方、町居崩れによって村人や田畠・家屋に多大な被害が生じた朽木谷上流域の葛川谷では、表2-2に示したように震災以後、全ての村々で石高が減少しており、震災から170年余りが経過した天保5(1834)年頃に至っても、全ての村で石高は回復していない。町居崩れは、その後の安曇川の河道を変化させてしまうほど大規模であり、町居村・榎村・坊村といった葛川谷での人的・物的被害は、下流域の朽木谷の村々に比べて大きなものであった。しかし、町居崩れで形成された天然ダムの決壊によって田畠などに被害が及んだのは、下流の貫井村・細川村までであって、

<sup>とちゅう</sup>  
柄生村より下流域の被害は局所的で小規模なものであったと想定する。

| 村名  | 正保郷帳<br>(正保元年成立) | 元禄郷帳<br>(元禄14年成立) | 石高の増減        | 天保郷帳<br>(天保5年成立) | 石高の増減    |
|-----|------------------|-------------------|--------------|------------------|----------|
| 荒川村 | 119.200石         | 119.200石          |              | 119.200石         |          |
| 野尻村 | 65.370石          | 65.370石           |              | 65.370石          |          |
| 市場村 | 191.460石         | 191.460石          |              | 191.460石         |          |
| 坊村  | 144.360石         | 33.4366石          | (-110.9234石) | 33.4366石         |          |
| 宮前村 | 124.360石         | 235.2834石         | (+110.9234石) | 235.2834石        |          |
| 下柏村 | 85.086石          | 85.086石           |              | 85.086石          |          |
| 上柏村 | 95.087石          | 95.087石           |              | 95.087石          |          |
| 岩神村 | 83.500石          | 71.7438石          | (-11.7562石)  | 71.7438石         |          |
| 穴瀬村 | 35.160石          | 46.9162石          | (+11.7562石)  | 46.9162石         |          |
| 古川村 | 131.300石         | 131.300石          |              | 131.030石         | (-0.27石) |
| 大野村 | 78.600石          | 78.060石           | (-0.54石)     | 78.060石          |          |
| 村井村 | 88.433石          | 88.433石           |              | 88.433石          |          |
| 柄生村 | 129.693石         | 129.690石          | (-0.003石)    | 129.690石         |          |

表2-3 柄木谷（現、高島市柄木）における村別の石高（作成：西山昭仁）

- 注）1.（有）平凡社地方資料センター編：日本歴史地名大系 第25巻 滋賀県の地名、平凡社、1991、p1180の表より作成。  
 2. 坊村と宮前村、岩神村と穴瀬村では、正保期～元禄期の間に石高の付け替えがあつたらしく、一方で減少した石高の分だけ他方で増加しているため、四つの村での合計石高に変化はない。

## 参考文献

（有）平凡社地方資料センター編：日本歴史地名大系 第25巻 滋賀県の地名、平凡社、1991.

## 史料

『寛文二年日記』（『梅辻家文書』）：東京大学地震研究所編、新収日本地震史料 第二巻、（社）日本電気協会、pp.213-215、1982.

『慶安元禄間記』：国立公文書館内閣文庫所蔵（請求番号 150-0127）、文部省震災予評議会編、増訂大日本地震史料 第一巻、和光社、pp.819-820、1941.

『元延実録』：国立公文書館内閣文庫所蔵（請求番号 150-0101）、文部省震災予評議会編、増訂大日本地震史料 第一巻、和光社、pp.820-823、1941.

『殿中日記』：国立公文書館内閣文庫所蔵（請求番号 163-0216）、文部省震災予評議会編、増訂大日本地震史料 第一巻、和光社、pp.816-818、1941.